
秋の超能力者(サイコキネシスト)

あきよう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイコキネシスト
秋の超能力者

【Nコード】

N2426Z

【作者名】

あきよう

【あらすじ】

突如俺のクラスに転校してきた謎の美少女「紅葉もみじ」。初日早々”放課後グラウンドに来てください”という手紙をもらって行った先には紙を自由自在に操る彼女の姿があった。「あなたにも私みたいに能力を使う素質があるの」なんだった？ この俺にそんな能力なんてあるわけないだろ？ それに目的が闇に紛れて人を襲う妖を人しれず退治するなんて……！

史上最高のバトルファンタジー小説、ここに登場。

第01話「デアイ」

何でこんなことになっているんだ……。

そんなことをふと思いつながら俺、さかきばらゆうた榊原悠太はグラウンドを全力で走っている。

俺は過去の自分にそう問いかけてみたくなる。そして出来るならそのままそいつを殴り飛ばしてしまいたい。——痛いのは自分なわけだが……。

こうなった原因は逆上ると大体九時間ほど前になる——。

——約九時間前——

俺はいつもどおりチャイムギリギリに教室の中に入る。理由は簡単で俺には友達と呼べる奴が殆ど居ないからだ。

人は自分と少しでも違う奴がいると省きたがる。かく言う俺も大多数とは少し……いやかなり違った価値観を持っているらしい。それが原因であり日常となってしまった喧嘩が省きの対象に拍車をかけていた。

いつものように騒がしい教室の中を通りうるさいなと感じつつも俺は自分の席へ着く。

「おーい、悠太ー」

しかし何事にも例外はあるようで、昔から俺なんかに声をかけてくる友人と呼べる人物、朽木達也くちきたつやが教室の後ろから声をかけてくる。まあ、嬉しいといえば嬉しいのだが、

「うるさいぞー。教室では静かにしなさいといわれてるだろうが」
半分本気、半分照れ隠しといった感情を込めながら何時ものような極普通の会話をしていた。……そう、何時もと変わらなかったのだここまでは。

「そーいや悠太は今日、転校生が来るって話は聞いてる？」

俺が教師の話を聞いてないということはよくあることで別段珍しいという話でもないが、一つだけおかしく感じることもある。

「じゃあ、何で今日に限ってこんなに静かなんだ？」

何時もならうるさいぐらいの筈の教室は今日に限ってなぜか静かになっている。まだこれでも騒いでいる方かもしれないが、何時もの様子から考えると驚くぐらいに静かだ。

そもそも朝からなにか変なのだ、変に浮き足立っているというのになぜか騒ぎ出さないという、なんとも矛盾したような変な雰囲気
が流れている。

「今日転校してくる人は女子みたいだからね、みんなそれで浮き足立ってるんだと思うよ？」

ほー、そんな理由ですか。ちなみにコイツはなかなか友好関係が広い。何故今でも俺の友人をやっているのかということが疑問に思
うくらいに広い。

「おーい、席につけ。ホームルームを始めるぞー」

いつものように暑苦しいような格好をした、担任が入ってくる。
あのなりで体育教師でなく数学教師というのがなんとも面白いギャ
ップだ。

何時もと違うことがあるとすれば、後ろから見知らぬ女子生徒つ
まり転校生が着いてきていることぐらいだ。

「まあ、知ってる奴もいると思うが今日は転校生を紹介する。じゃ

あ自己紹介をしてくれ」

そう言って担任は転校生に対して自己紹介をするように諭す。そしてその女子生徒は黒板に紅葉もみじと書いた。そしてこちらを向
き、

「私の名前は紅葉もみじ（こうようもみじ）です。よろしくお願いします」

その転校生の特徴で一番に目につくのはなんといっても髪の色だ。名前と同じように赤い色の髪を両側に一個ずつ束ねたツインテールでまとめている。日本人特有の黒髪の俺とはまったく違う。

そして、なによりそいつは美少女といえるような顔立ちをしていた。

まあ、所詮高嶺の花。俺には関係無い人物だろうと高をくくる。しかし、そいつは教室の全体を見回し俺の方を見て一人で納得したかのような頷きをする。俺はあいつと会った覚えはないんだが……。 「それじゃあ紅葉は一番後ろの右側、その空いてる席を使ってくれ」

そうした後、教室が少しざわついている。予想以下なのか、予想以上なのか分からないが話しあっているのだろう。

自分の席に着く前に紅葉は俺の席の横を通り、一枚の紙を机の上においていく。

そこには綺麗な字で”放課後グラウンドに来てください”と書いてあった。

いきなりの誘いに俺は困惑して数秒の間、何が書いてあるのか理解出来ないでいた。そもそも友人と呼べる人物の少ない俺にとって
は他人から誘われること自体が少ないのだ。それが女子からの誘い
となると、母親以外皆無としか言い様がない。

しかし、俺は紅葉に会ったことがあるのだろうか。普通は初めて会ったヤツのことなんかいきなり誘わないだろうし、さっきもなにか一人で納得をしたような頷きをしていたということはやはり、会ったことがあるのだろうか？

どのように考えても出てこないが行ってみれば解るだろう。そう思った俺は放課後までそのことを深く考えずに過ごし、グラウンドへ向かって行き、そこでいきなり襲われていた。

——そして今につながる——

少し眺めの回想を終え、俺は一気に現実に戻される。意味が分からないという人もいるだろうが正直に言おう俺が一番意味が分からない。と言うか今さっきまでの回想が正しいものに思えるほど現実^{いま}は現実味のない世界になっている。

それはなぜか？ と問われたとしたら俺は「紙で出来た犬に追われているからです」と即答が出来る。言ったとしても信じてくれる人物など今ここにいる紅葉だけだろうが……。

「おい、これはどういう事だよ！」

もう何度目かも分からない問を紅葉に向かって叫ぶ。

「……試練みたいなものかな？ あなたにも私みたいに能力を使う素質があるの。力を使うコツは精神の集中だから、はい！集中して……回答はしてもらえた。初めてまともに出来た会話だ。だが答えと回答はちがうと俺はおもう。」

回答はあいつが理解していることかもしれないが、俺がその回答を理解しないと答えには成り得ない。

そして第一に俺はそんな回答を期待していない。

力？ 素質？ 精神の集中？

この歳にもなってそんなことを信じている奴なんているわけない。だが今の俺はそのありえない状況におちいつている。

何で同じ奴に襲われたり、助言を受けているんだ？そんなことを思いながらも、今はこいつの話しか信じれない状況だ。仕方なく俺は言われたとおりに集中してみる。そしてそのまま全力で、その犬らしきものを殴ってみる。

「オラァ」

だが俺の渾身の突きは軽く避けられ、逆に俺が噛み付かれる形となる。

「おい、精神の集中ってどうやるんだよ！」

痛みはあるもののそんなことは四の五気にしていられないような状況だ。俺は少しでも何かこの状況を抜け出すためのヒントを得るために叫ぶ。

「朝ちゃんと名前言ったでしょ。私の名前はおいじゃないわよ」

このやろう……。いきなり犬をけしかけてきたと思ったら……。

こんな状況でもそんなことを気にする紅葉に苛立ちを感じながらも俺はさっきの言葉を言い直す。

「紅葉、精神の集中ってどうやるんだ」

「紅葉さん、でしょ？ 榊原くん」

俺を小馬鹿にしたようにそう言ってくる。このアマが……。下手に出れば調子に乗りやがって……。

怒りはつのるもの、今はコイツに頼る他ないことは確かだ。

「紅葉さん、精神の集中の仕方を教えてください。お願いします」

ほぼ言葉は棒読みであるが、できるだけ丁寧な口調で言ってみる。

「そんなの知らないわよ」

唐突にそして、それが当たり前のようにそう言ってくる。

「はあ!？」

噛み付かれている腕の痛みも忘れてしまうほど、俺は放心状態になっていた。

「当たり前じゃない。一人一人集中の仕方だって違うし、私は能力を使いながら話せるけど話せない人だって居るのよ?」

コイツはふざけているのか本気なのかどっちなんだ?

それよりも第一にこの女を信じてもいいのかということさえも、疑わしくなってくる

「はなせ！」

腕を振り噛み付いている犬を離れさせる。

あれだけ痛かったというのに、紙だったからなのか血どころか、痛みですらもうすでに無くなっている。

「さあ、早く集中して、集中！」

それが掛け声のように犬はもう一度俺に襲いかかってくる。

「だから集中ってどうやるんだ！」

俺は犬から逃げながら、声を荒くして質問する。

「だから解らないって言ってるでしょ。あなたがどんな能力を使うのかも解らないのに、そんな事わかる訳ないじゃない！」

何故か逆ギレされ俺が怒られる。理不尽だ……。

「じゃあ何で俺が能力が使えるってわかるんだよ」

「勘……かな？」

勘……だと……。ふざけるなよ！こいつ。ここまでしているんだからもっとちゃんとした理由があると思って、俺にもそういう力があるのかな……と少し期待したりしたというのに！こいつ今なんて言いやがった？勘とほざきやがったぞ。

さっきまで心の内に秘めていた激情が、俺の中で爆発する。

「オラァ」

唸り声と共に、拳を振るう。

ブルン

しかし拳は犬の横を抜けてしまう。さっきまでと違うことがあるといえは今度は犬は後ろに吹き飛んだということだ。

この感覚は……？俺は少し困惑しながらもこのことについて少し詳しく考えてみる。

拳があたってないというのに犬は吹き飛んだ。

多分この感覚は紅葉の言っていた精神の集中と言う奴の感覚だ。だけど……違う……。こんなにでかいものじゃ安定にしない。もっと鋭利に、もっと小さく、もっと冷静に……。

詳しいことなど何も知らないはずの俺はほぼ本能的にこのことを直感する。

俺から何か変化を感じ取ったのかさっきまで追いかけて気はしたが自分から仕掛けることのなかった犬が俺に向かって飛び掛ってくる。

俺は飛び掛ってくる犬に対して鋭く腕を地面と平行に振るう。

そしてその犬は一撃で吹き飛び、ただの紙に戻る。

しかし今度は拳ではなくその手に握った『何か』でだ。しかしその『何か』は俺が驚くと同時に消えてしまいそれが何かを確認することができなかった。

「少しはやるじゃない。やっぱりあなたを選んで正解だったわ」
紅葉は拍手をしながらこっちに向かってくる。少しどころか、大いにバカにされている気分だ。

「で、これはなんなんだよ」
俺はずっと疑問に思っていたことを聞く。

「じゃあ今日の夜にまたこの樹の下に集合ね。じゃあ」
そう言ってグラウンドの端にある気を指さして行こうとする。

「おい、待てよ！ まだ何も教えてもらってないぞ」
俺はそう言いながら紅葉を止めようとする、紅葉は振り返り、
「夜に話すって言うてるでしょ？ じゃあまた木の下でね」

「おい、待てよ」

そう叫んでも紅葉は止まらず帰っていつてしまう。西の空に少しずつ沈んでいく夕日がやけに目に眩しかった――。

第02話「ウラガワ」

何故夜に集まるのだろう。

その疑問が頭をよぎる。

この学園は全寮制のため、寮のない学校よりかは夜に集まりやすい。

だがそれでも夜に出歩くのは校則では禁止されている。

何故このまま話してくれてもいいものを、わざわざ捕まる可能性のある夜にするのだろう。

そんなことを考えているうちに寮の前につく。

「悠太！」

聞き覚えのある声で、後ろから名前を呼ばれ背中を叩かれる。

普通なら誰か確認するところだが、俺にこんなことをする奴は一人しかいない。

「達也か……」

俺はその言葉の主、朽木達也^{くちきたつや}の方を向く。

さっきまでのこともあり、いつもより冷たい反応にはなっているが。

「テンション低いね……。何かあったの？」

何も無いという嘘になるが、さっきまでの話は体験したことのある人間にしか解らない話だし、俺の数少ない友人を変なことに巻き込むわけにはいかない。

そう思い俺は、話を適当にはぐらかす。

そして俺は夕食を食べ部屋に戻る。

時計は午後八時十五分を指している。

あたりは完全に暗く闇に包まれている。

俺は今更になって気づいたのだが、あの木の下に夜集まると聞いただけで詳しい時間なんて聞いてない。

どうするか……。

そう思っていると、何かが窓に当たる音がする。

何の音だ？

そう思い俺は閉まっているカーテンを少しだけ開ける。

そこには鳥の形をした紙がくちばしで窓を叩いていた。

こんなことが出来るのはあいつしかないよな……。

俺はそのまま窓をあける。

そうすると、よほど勢いがついていたのかその鳥はそのまま勢い良く部屋の中に入ってくる。

俺の方に迷いなく突っ込んできた鳥を避けようとすると、その鳥はいきなり紙に戻る。

その紙には女子の字で、

「八時半木の下に集合」

とだけ書いてあった。

今の出来事で、時間は八時二十分を越えている。

急がないと……。

俺はまだ制服のまま着替えていなかったため、そのまま急いで部屋を出る。

俺の部屋は一回の一番奥。玄関には遠い場所にある。

全力でこのまま走っても間に合わないんじゃないか？

そんな疑問はあるが、それでも俺は全力で走って集合場所に向かう。

木の下に着くまでに、人に一人も会わなかったことが奇跡のようだ……。

よく全力では、走っているので慣れてはいるが誰かに見つかってはいけないという緊張感の中ではいつもより無駄に疲れる。

ハアハアハア

俺は集合場所についたときにはもうすでに息が荒くなっている。木に手を当てて、体を支え深呼吸をして息を整える。

「あら、案外早かったじゃない」

「お前わざとあの時間に送ったんじゃないだろうな……」

わざとらしく紅葉が言っている思えたため、俺の口からそんな言葉が漏れていた。

「たしか色々とあなたに話さないといけないのよね」

「ああ、頼むよ」

この女はやっと話す気になったのか……。

「じゃあ順を追って説明するわね。まずは能力のこと。まず私やあなたが使う能力は異能力って言う、まあ地球上のあらゆる原理を無視した能力のことを言うの。その中でも、私たちが使う能力は超能力と呼ばれるもののなの。能力の名前は他にもあるけど今はこれだけでもいいわよね？」

「ああ、どうせ一気に言われても理解出来ないだろうしな」

超能力、聞いたことぐらいはあるが、俺はスプーン曲げやテレパシーなんてものは一切出来やしないんだがな……。

「まず超能力っていうものは、自分のエネルギーと自然のエネルギーをあわせてものを作り出したり、物をまとったりする能力なの」

「いや、悪いもうすでに良く解らん……」

超能力と聞いて簡単な説明かと思っていたら、一発目からよく解らない説明が来た……。

「どこら辺が解らないの？」

紅葉はもっともなことを聞いてくる。

全部がよくわかってないんだがな……。特に今の自分の存在とか俺、本当に地球人なのかな……。

だが全部を聞いていると長くなりそうなので、本当によく解らないところだけを聞いておく。

「まず、そのエネルギーがなんたらってのはなんなんだ？」

「これはあんまりきにしないでいいのよ。私が言った素質がこのエネルギーのことを言ってるの。それにあなたはもう能力が使えるからそこら辺のことは、へーそうなんだ。ぐらいいい流していいわよ」
そんな適当でいいのか……。

疑問は残るがまあ、紅葉がいいと言っているならいいのだろう。

「で続きなんだけど。超能力はさっき言った通り作り出すとかまでの能力ばかりだから攻撃は本人がする必要があるの。だからそのへんは格闘センスとか本人の実力とかによるわね」

「だが紅葉。お前の能力は確か自分の意志で動いたりしていたはずだが？」

確か紅葉の場合は紙の動物が戦っていて本人は戦っていなかったはずだ。

「何にだって例外はあるものよ。それに私の能力は紙に命を吹き込む能力が本質なの」

だんだん紅葉の言っている超能力の意味が分かってきたような気がする。

……気のせいかもしれないが。

「で私は超能力者主体の異能力者団体の黒の教団に所属しているの。唐突で悪いんだけどあなたうちに入ってくれない？」

本当にコイツはなんでも唐突に言う奴だな……。

「具体的に何をするんだ？ その団体での仕事は」

「仕事はいたって簡単よ。夜この学園に集まってくる妖を退治するの。そういえば、この学校の裏に神社があることを知ってる？」

学園の裏に神社があったなんて初めて知った……。

「もうだれもない神社なんだけどね。憑神って言うその土地とかに着く位の高い妖が、その場所に他の妖を寄せ着けちゃうの。普通妖は昼間は動けないし力も使えないの。でも憑神だけは昼間でも動くことが出来るの」

「じゃあその憑神ってのをぶっ飛ばすのはいけないのか？」

紅葉は少し苦笑して俺の質問に答える。

「出来る人はいないことはないけど、それでもごく少数の人間だけなの。それに妖でも神様は神様だから居なくなってしまうたらその土地に加護とかがなくなっちゃうの」

はた迷惑な神様だな……。

「それで私たちの仕事は周りに集まってくる妖をかること。あんまり憑神の居る土地に居と力を蓄えて危険になっちゃうから弱いうちに私たちが狩るの」

狩るって……。結構恐ろしいことをさらっといったなこの女……。それだけこう言うことには慣れているということか。

「それで次はあなたの能力の説明ね。あなたの能力は「創造」（メイク）。空気から道具を作り出す能力って聞いたわ」

聞いたという単語から察するにさっき言った団体の黒のなんたら誰かに聞いたのだろう。

「……創造ねえ……」

出来ればその話を最初から聞きたかった。

だが、実際に目にした今の俺だから信じられる話であってそれを見ていない俺だったら絶対に信じられなかっただろう。

「ちなみに私の能力は「紙造形」（ペーパークラフト）って言う名称で能力はさっき言った通り紙に命を吹きこんで生き物に変える能力なの」

聞いてもいないのに自分の能力の説明までしてくる。

このフレンドリーな感じが最初に欲しかった……。

紅葉が自分の腕時計を見る。

俺も時間を確認しようと右腕を見るが急いで部屋を出てきたため俺の右腕にいつもの腕時計はない。

仕方なく校舎についている時計を見ようとするが、空は暗く既にもう時計は見えない。

「このあたりは特に闇が深いから時計は見えないわよ。今は九時二十分そろそろお出ましの時間かしらね」

そう紅葉が言った瞬間を測ったかのように何かが飛び出す。

……あれはでかい蜘蛛か？

飛び出してきたのは蜘蛛のような八本の足が付いている昆虫のような生き物だ。

「あれが……妖か？」

「そうよあれが妖。悪霊がやんだものだけど、無能力者にも見えるし物理的な攻撃も効くわよ。あの妖の名前は「鎌蜘蛛」（かまぐも）っていう名前よ」

普通蜘蛛は外層が柔らかく簡単に潰れるような昆虫だがあの鎌蜘蛛は明らかに表面が硬くなっており前の二本の足は大きな鎌になっている。

「ああいう斬るとかの攻撃してくる妖、苦手なのよね……」

たしかに紅葉の能力では一撃で粉砕されてしまっただろう。

鎌蜘蛛は周りを伺った後、こっちに気づいたのかこっちに向かってくる。そして鎌を振り回し斬りかかってくる。

「うわっ」

とっさのことに俺は前方に回転し、攻撃が当たらないように転がる。

その攻撃は俺を狙っていたためその攻撃は誰にも当たらない。

だがその攻撃は手前の木に当たりそれは一刀両断される。

攻撃力と切れ味は半端じゃないな……。

そう思っていると、

「紙造形、狼^{ウルフ}」

そう言いノーマークになっていた紅葉が能力を発動させる。

俺が初めて合った時に襲われた犬よりも一回り大きい言葉通りの狼だ。

その狼は鎌蜘蛛に噛み付くがまるでダメージが無いかのようにそのことを気にしていない。

俺は何をすればいいんだ？ 自分に超能力が宿っていることが分かったとしても、その使い方は俺自身がいまいち分かっていない。習うより慣れろとはよく言われるがこんな判断一つで命が簡単になるような実践では試して見ることにすら命取りになるだろう。

しかし、そんなことなど考えずにがむしやりに動いていることが今回の正解だったらしい。

俺の真上にはヤツの鎌が迫っていた。

――避ける――

普段なら反射的に体が動くような鋭い一撃。しかし次の行動を迷っていた俺は防御の姿勢を取ることすら出来ない。

こんな所で死ぬのか？ そんなことを思いながら俺は目を瞑りながら次の一撃を待ってる。しかし、次の一撃が俺に当たることはなかった。

次の瞬間俺は空を飛んでいた。より精密に言うならば大柄な鳥に掴まれて空にいる。

あまりの驚きに思考がうまくまとまらず声すら出ない。

いきなりのことだったが、俺は紅葉の方を見る。しかし紅葉は俺の方を見た後意味深に頷き、鎌蜘蛛の近くに何かを投げた。

「……目をつぶれ！」

誰が入ったのかも確認する暇もないがどこからかそんな声が聞こえる。

何故？ と疑問にする時間が無駄だったのだろう。俺は次の瞬間、強烈な光に視界を奪われていた。

「……目は見えるか？」

足が地に着く感覚と共に誰だか解らない声で質問が投げかけられる。

「お前は誰だ？」

「……その質問をするってことはまだ目は見えてないね」

妙にため息混じりの返事が返ってくる。俺自身は特に返事をしていないつもりはなかったのだが……。

何故かこの頃、自分勝手に納得するような奴と接点が多いような気がする。普段の行いが悪いわけではないと思うが……。

「七瀬くん、大丈夫だった？」

今度は聞いたことがあるような声が聞こえてくる。この声は紅葉だろうか？

「……こっちは問題ない。だけどこっちは直接食らったみたいだよ」

七瀬と呼ばれた男は、紅葉と知り合いのようだが俺とのやり取りと同じような感覚で返事をしている。

「……どうだった？」

「どうだろう……少なくとも私では倒すことどころか傷つけるのも無理そうってところかな？」

二人して主語の抜けた会話をしている。多分話してることは先刻の鎌蜘蛛の事だというのはなんとなくつかめた。

少しの間話しながら待っていると俺の視力もだんだんと戻ってきてちゃんと見えるようになってくる。

「じゃあ、さっき行った通り動いてね」

「……」 「……分かった」

そして俺たちは紅葉の言葉と共にもう一度鎌蜘蛛に向かって走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426z/>

秋の超能力者(サイコキネシスト)

2012年1月1日22時52分発行